

氏名(本籍)	おおえみつる 大江 瀧 (愛知県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第1,244号
学位授与年月日	平成9年2月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	C. M. ウィリアムズ —幕末明治の宣教師の伝道と生涯—
主査	筑波大学教授 文学博士 大濱 徹也
副査	筑波大学教授 文学博士 池田 元
副査	筑波大学教授 Dr.phil 和田 廣
副査	筑波大学教授 博士(文学) 高桑 守
副査	筑波大学助教授 文学博士 堀池 信夫

## 論文の内容の要旨

本論文は、19世紀に日本が開国した時、最初に来日した米国聖公会派遣宣教師C. M. ウィリアムズの生涯と伝道の足跡をふまえ、日本聖公会が誕生する過程を神学と財政を視野にいれ、米国聖公会文書館所蔵の伝道母体側の半世紀にわたる原史料を丹念に解析することにより、具体的に検証した作品で、はじめにと6部13章とまとめ、財務統計資料、関連文献目録から構成されている。

「はじめに」は、日本キリスト教史研究の課題を整理し、伝道母体側からの考察が欠落している研究状況を問い、本論文が意図する世界を簡潔に提示したのものである。

第1部「伝道精神の発揚」は、ウィリアムズが生涯堅持しつづけた宣教精神の基底にある教派性、法的思考力と遵法精神、財政問題等に対する見識を養成した原点につき、ウィリアムズの「家系と家族」「生い立ち」「神学校生活」「宣教師の任命」にいたる若き日の姿を描き、東洋伝道に出発するまでの足跡を検証したものである。

第2部「日本開教への道」は、中国派遣宣教師ウィリアムズの伝道活動を「中国伝道の軌跡」として位置づけたもので、プロテスタント宣教師の中国進出が欧米列強の軍事力を背景とした宣教であったことの功罪を問い、日本ミッション創設が日米間の条約締結によってうながされたもので、日本宣教も強く政治に規定されざるを得ない状況にあったことを指摘している。

第3部「日本伝道の展開」は、「長崎ミッション草創期」における日本宣教論を清国に派遣された英国人宣教師との比較において検討することで、中国伝道の経験の有無が来日宣教師の間においても禁教令撤廃問題等への関与の仕方で差があることを明らかにするとともに、駐清伝道主教ウィリアムズが本国伝道機関と宣教方針や財政をめぐる確執に苦しめられながら、地についた日本伝道をいかに模索したかを大阪と東京における伝道事業、教育事業、医療事業を財政問題をふまえて考察し、日本人による自給教会の形成に早くより着目し、指導することで、国民教会たるべく日本聖公会が自立する方途を検討したことを明らかにしたものである。

第4部「日本聖公会の成立」は、英国聖公会との主教管轄権問題、統一祈禱書邦訳等において果たしたウィリアムズの英知と指導性が、その神学への造詣と教派への忠誠心にささえられたものであることを解析し、日本聖公会法憲法規作成を可能ならしめ、日本聖公会成立の基盤を築いたことを具体的に述べたもので、いままで英国人主教E. ビカステスの功績とされていた日本聖公会誕生物語が史実によらない誇張が生める「神話」にすぎない

いことを明確にしている。

第5部「教会の隠士」は、主教という宣教の表舞台から退くにいたる「主教辞任の経緯」をあとづけ、「主教辞任後の軌跡」で来日プロテスタント宣教師が本国における生活スタイルを日本にもちこみ「文明の優位性」を誇示する伝道の業に励んだ姿と対比し、ウィリアムズが「西洋乞食」と揶揄されるほどに、清廉質素な生活を貫くことで「聖者」として日本人信者から慕われた宣教師であったことの意味を問うなかに、ウィリアムズが指導力の欠如や緊縮財政の故に旧来批判されてきた根拠がいわれなきものであることを明らかとなし、苦しい伝道資金を補うために私財を投与して日本聖公会の発展に心血をそそいだ宣教師像を浮かびあがらせている。

第6部「神学と財政」は、「ウィリアムズの神学」が「米国聖公会の救済神学」をふまえ、ヴァージニア神学校においてウィリアム・スパローの神学に多くを学ぶなかで、救済神学としてのアルミニアニズムを重視したものであること、法憲において①新旧約聖書、②使徒信経・ニケア信経、③洗礼・聖餐のニサクラメント、④執事・司祭・主教の三聖職位の四要素を簡潔に提示することで、カトリックとプロテスタントの架け橋となる場を用意したなかに、教会一致の神学への目配りをなし、日本人の自律的教会形成への備えをしていたことを指摘している。かつ、日本教会の自律とかかわらせ「海外伝道母体の財政」を米国聖公会伝道局の組織と財政構造を具体的に検討することで、外国伝道が債務財政で展開されていたため、宣教師に現地での自活をうながさざるを得なかったことを明らかにし、日本聖公会が日本人の教会として自立しようとする時にいままでの日本ミッションへの不遇を補うかのごとく財政支援を増加させ、自立への意欲をそそいだことを指摘したものである。

「まとめ」は、アングリカニズムに表象される聖公会の日本宣教が日本の近代化にいかなる役割を果たしたかを、日本聖公会の足跡として総括するとともに、宣教師ウィリアムズが「文明の優位性」を説く宣教論から距離をとり、日本における教会一致への眼を秘めて宣教に励んだ稀有の牧者であったことを確認することで、C. M. ウィリアムズを時代に位置づけようとしている。

## 審査の結果の要旨

本論文は、日本キリスト教史研究において、はじめて伝道母体側の史料を克明に踏査、検証することで、宣教師・宣教団の場から日本伝道を具体的に解明することをめざした最初の本格的な作品であり、C. M. ウィリアムズの生涯を「神話」の帳から解き放ち、その足跡を日本聖公会誕生のドラマとかかわらせ、史料によってかたらせる即事的描写で実像にせまるのみならず、日本伝道における財政問題を米国聖公会の財政構造と関連づけて検証することで、プロテスタント伝道における資金と伝道団・教会の財政をはじめて具体的に考証した研究として高く評価できる。

その第1は、米国聖公会公文書館所蔵の日本宣教にかかわる半世紀の諸記録をふまえて記された最初の日本キリスト教史であり、いままで伝聞や個人的備忘録でかたられていた日本宣教と教会形成の「ものがたり」を史料をふまえて書き直したこと。

第2は、C. M. ウィリアムズの実像を、史料に即事的にかたらせることではじめてあきらかにしたこと。

第3は、日本聖公会の成立が「日本聖公会史」において英国人主教ビカステスの業績として位置づけられていることが謬見によることを指摘し、C. M. ウィリアムズが教会政治と神学の問題を解決する上で主導的役割を果たしたことを明確にしたこと。

第4は、日本伝道における資金問題を米国聖公会の伝道体制と財政構造に位置づけて解析することで、日本教会の自給・自立への姿勢を位置づけたこと。

第5は、日本聖公会の法憲・法規が作成される過程を明らかとなし、C. M. ウィリアムズの神学を問い、「教会の一致」への眼を秘めていたことを指摘したこと。

本論文は、C. M. ウィリアムズの実像を具体的に提示することで、日本聖公会成立史を描いた作品として高く

評価しうるものの、若干の問題も残されている。第1は、C. M. ウィリアムズを原史料の発掘で描くことに努めたがため、史料にかたらせる即事的手法をとったことがウィリアムズの内面性の分析に距離をとらせ、人物としての全人間像を提示することにいささか弱いこと。第2は、アングリカン・チャーチとしての日本聖公会が日本の国民教会となることをめざす自給・自立の神学的根拠を、日本におけるプロテスタントの他教派との比較で検討する視点が十分でないこと。

本論文は、これらの課題が残されているものの、日本キリスト教史研究にはじめて伝道母体側の史料で切りこみ、C. M. ウィリアムズの実像を明らかにし、日本聖公会の成立の歴史として位置づけた作品であり、とくに財政構造を本格的に論じるなど、未開拓の分野を解析した博士論文として学界に大きな問題提起をなし、貢献多きものと認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。